

宮本武蔵(二)



吉川英治全集

第18卷

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・18 宮本武蔵(二)

著 者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式講談社

東京都文京区音羽二二二(大代表) 郵便番号 一三二
電話 東京九四二〇局 二二二〇
振替 東京三九三〇

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特瀧

第一刷 昭和四十三年十月二十日 第二刷 昭和四十三年十月三十日

定価 六百八十円

© 一九六八年 吉川英治

目次

風の巻

空の巻

二六

三

宮
本
武
蔵
(二)

風
の
巻

枯かれ野の見み

一

丹波街道の長坂口は、指さして彼方に望むことができる。並木越しに、白い電光かのように眼を射るのは、その丹波境の標高で、また、京都の西北の郊外を囲っている山々の巒をなしている残雪だった。

『火を放ける』

と誰かいう。

春先なのだ。まだ正月の九日という日である。衣笠のふき嵐は、小禽の肌には寒すぎた。チチチチ野に啼く声も稚く聞えて耳に寒い。人々は、鞆の中の刀から腰の冷えて来る心地がした。

『よく燃えるな』

『火が飛ぶぞ、気をつけぬと、野火になる』

『案じ給うな。いくら燃え拡がっても、京都市中は焼けッこない』

枯れ野の一端に放けた火は、音を立てて、四十人以上もいる人々の顔を焦した。焔は、朝の太陽へ、脊を伸ばして、届きそうにまでなった。

『あつい、あつい』

と今度は呟く。

『もうよせ』

草を投げる者へ向って、植田良平が、煙たい顔して叱った。

そんなことをしている間に半刻は経っていた。

『もうやがて、卯の刻過ぎじゃないかな』

誰かいい出して、

『さよう？』

期せずしてみなが眉が、陽を仰いでみる。

『卯の下刻。——もはやその時刻だが』

『どうしたろう、若先生は』

『もう来る』

『そうさ、来る頃だ』

なにか緊迫してくるものを各々が顔に滲え出した。自然とそれが人々を無口にさせた。誰の眼も一様に、そこから街端れの街道を眺めて、生唾を溜めて待ちしびれている様子に見える。

『どうなされたのだろうか？』

のろまな声をして、どこかで牛が長く啼いた。ここは元、禁裏の御牛場で、乳牛院の跡とも呼ばれていた。今でも、野放しの牛がいるとみえ、陽が高くなると、枯れ草と糞のにおいが蒸れて来るのである。

『——もう武蔵は、蓮台寺野のほうへ来ていやしないか』
『来てるかもしれない』

『誰か、ちょっと、見て来ないか。——蓮台寺野とこことは、五町ほどの距離しかあるまい』

『武蔵の様子をか』

『そうだ』

『……………』

すぐ行くこうといつて出る者もない。煙の蔭にみな煤ったい顔をして沈黙した。

『——でも、若先生は、蓮台寺野へ出向かれる前に、ここでお支度をして行くという手筈になっているのだから。もう少し、待ってみようじゃないか』

『それは、間違いない手筈なのか』

『植田殿が、ゆうべ若先生から、確といひ渡されたことだ。よも間違いはあるまい』

植田良平は、そういう同門の者のことばを裏書して、

『その通りだ。——武蔵はもう約束の場所へ、先に来ているかも知れないが、敵を焦立たせようという清十郎先生のお考えで、わざと、遅刻しているのかも知れない。門下の者が、下手に動いて、助太刀したなどと評判されては、吉岡一門の大きな名折れだ。相手は多寡の知れた平人武蔵ひとり。静かにしていよう。若先生が颯爽とここへ見えらるるまで、林のように、我は、静観していることだ』

その朝。

二

この乳牛院の原へ、寄るともなく集まった者たちは、勿論、数から見ても、吉岡門下のほんの一部の人々に過ぎなかったが、その顔ぶれの中には、例の植田良平がいるし、京流の十剣と自称している高弟組の半分は見えているから、まず四条道場の中堅どころは、出張しているといつてもさしつかえない。

師の清十郎は、ゆうべ、

(助太刀の事、かたく無用)

と、これは誰へも同様にいい渡したこらしかった。

又、門下のすべての者は、きょうの師の相手である武蔵という者を、決して、

(多寡の知れた相手)

とは軽視していなかったが、そうかといつて、師の清十郎が、たやすく彼に敗れようなどとは、どうしても考えられないのであった。

(勝つに決まっているが)

という考えの上に、万が一にもという常識を乗せているのである。それに又、五条大橋へ高札を掲げたりして、きょうの試合を公開した手前、吉岡一門の威容を張って、旁々、清十郎の名を、この際、大いに晴れがましく世間へ喧伝させたいという——門下の者としては当然な力瘤も入れる気になって、試合場所の蓮台寺野からそう遠くないこの原にかたまり、やがてここへ立寄るはずの吉岡清十郎を待ちわびているのだった。

ところで——

その清十郎はどうしたのか、いっこう姿が見えないのである。

卯の下刻は、陽あしを見ても、もう迫っている。

『おかしいなあ?』

ここでは、三十余名の者が、そう呟きだして、植田良平の論ず静観の態度もすこしだれ気味になっていると、この乳牛院の原の一群を見て、きょうの試合の場所を、ここと思い違えた群衆が又、

『どうしたのだ、試合はいったい』

『吉岡清十郎は、どこに來ている?』

『まだ見えんが』

『武藏とやらは』

『それもまだ來ていないらしい』

『あの侍衆は、何か』

『あれは、どっちかの、助太刀だろう』

『なんのこった、助太刀だけが來て、かんじんな、武藏も清十郎も來ないとは』

人のいるところへ、人は殖えて來るのだった。

『まだか』

後から後からと、弥次馬はここへたかつて來る。そして、

『まだか』

『まだか』

『どれが武藏?』

『どれが清十郎で』

と、ざわ声を立てている。

さすがに、吉岡門下の一かたまりが見える附近へは立ち入つて來ないが、乳牛院の原の彼方此方には、萱のあいだや樹の枝にまで、人の頭が、無数に見えた。

——その中を、城太郎は歩いてた。

例の体より大きな木剣を横たえて、足よりも大きな藥草履を

履いて、乾いた土のうえをボクボクと埃を立てて歩きながら、

『いないな、いないな』

と、人の顔をキョロキョロ物色しながら、この広い原のまわりを周って歩いてゆく。

『——どうしたんだろ?』

お通さんは、きょうのことを、知らないはずはないのになあ。……あれから烏丸様のお館へも、い

ちども來ないし』

彼のさがしているのは、武藏よりも先ず、その武藏の勝敗を

案じて、きつと、今日ここへ來ていなければならぬはずの、

お通の姿であつた。

三

小指に怪我をしてもすぐ蒼くなるくせに、女は、案外、残忍なことだの血を見ることに、男とは違つた興味をそえられるものらしい。

きょうの試合は、とにかく、京洛中の耳と眼をそばだたせている。それを見ようとして來ている雑沓のうちには、かなり女の姿があつた。数人で、手をつないで歩いて來る女たちさえあつた。

けれど、その女の中に、お通のすがたは、いくら捜しても見当らなかつた。

『変だなあ』

城太郎は野のまわりを、くたびれるほど歩いた。

(もしかしたら、あの日から——五条大橋でわかれた元日から——病氣でもしているんじゃないかしら?)

そんな臆測を描いてみたり、なお突きすすめて、

「お杉婆は、あんな巧いことをいつていたけれど、お通さんを騙くらかして、どうかしているのかも知れないぞ? ……」

彼は、そう考えると、不安で不安でたまらなくなった。

その心配さ加減は、きょうの試合の結果がどうなるかというところの比ではない。城太郎は、きょうの勝負を、少しも心配にはしていなかった。

野を繞って、それを待っている数千の見物人が、すべていつてよいほど、吉岡清十郎の勝を信じているように、城太郎ひとり、

(お師匠さまが勝つ!)

と、信じて疑わないのであった。

大和の般若野で、宝蔵院衆のたくさんな槍を相手にまわして闘った時の武蔵のたのしい姿を、彼は、ここでも頭にえがいて、

(負けるものか、みんな蒐^あつても……)

と、乳牛院の原に屯^{とん}している吉岡方の門人まで、敵の数に入られて、なおかつ、堅く武蔵の腕に信頼を持っていた。

——だから、そのほうにはなんの取り越し苦労もしていないが、お通の来ていないことは、彼を落胆^{らくたん}させた程度でなく、なにか、お通の身の上に、凶い事が起っているような胸騒ぎを駆りたててくる。

彼女が——

五条大橋からお杉隠居に従って別れてゆく時、

(暇を見ては、わたしも、烏丸様のお館へ行きますからね。城太さんは、自分、お館におねがいで、あそこに泊っておいでなさいね)

そういった。

たしかに、そういった。

だのに——あれから今朝で九日目——そのあいだの正月の三日にも、七くさにも、ついにいちども、お通は訪ねて来なかったではないか。

(どうしたんだろう?)

という城太郎の不安は、もう二、三日前から持ち越して来ているものであった。それも今朝、ここへ来るまでは、一縷^{いち}の望みをつないでいたのであったが——

『……………』

ぼつねんど、城太郎は、原の真^ま中をながめていた。焚火^{たきび}のけむりを囲んでいる吉岡の門人は、遠方から数千人の見物の眼につつまれて、物々しげにかたまっているが、まだ清十郎の来ないせいかな、なんとなく、氣勢^{きせう}が冺^おつていない。

『おかしいなあ、高札には蓮台寺野とあったのに。試合場はここかしら?』

誰もみな不審^{ふしん}がらないでいる点を、城太郎だけが、ふと不審に感じ出していた。すると、彼の左右をながれて行く人混みのあいだから、

『わっぱ。——こら、こら、それへ参る童^{わっぱ}』

と、横柄^{よこがら}に誰か呼ぶ。

見ると、それは城太郎にも覚えのある——つい九日前の元日の朝——五条大橋のたもとで、朱実^{あけみ}と囁^{ささや}いていた武蔵へ向い、人をばかにしたような大笑^{おほい}いを捨てて去った佐々木小次郎であった。

四

『なんだい、おじさん』

一度でも顔を見ているだけに、城太郎は、馴々しくいう。

小次郎は、彼のそばへ寄って来た。なにかものをいう前に、先に足もとから頭へ、じろりと眸を上げるのが、この若者のくせであった。

『いつそや、五条で会ったことがあるな』

『おじさんも、覚えていたかい』

『おまえは、女の人と一緒にだったね』

『アアお通さんと』

『お通さんというのか、あの女は——。武蔵と、なにか縁故のある者か』

『あるんだろ』

『從兄妹か』

『ううん』

『妹か』

『ううん』

『じゃあ、なんだ』

『すきなんだよ』

『誰が』

『お通さんが、おいらの、お師匠様を』

『恋人か』

『……だろう?』

『すると、武蔵はおまえの先生というわけか』

『うん』

これは、明確に、誇りをもって、うなずいた。

『はあ、それで今日も、ここへ来たのだな。——しかし、清十郎のほうも、武蔵のほうも、まだ姿が見えぬというて、見物が氣をもんでいるが、おまえは知っているだろう。武蔵はもう、旅宿から出かけたろうな』

『知らないよ、おいらも、捜しているんだもの』

後から二、三名、ばらばらと駆けて来る聲音がした。小次郎の鷹に似ている眼はすぐそれへ振向いた。

『や、それにおられるのは、佐々木殿ではないか』

『オ、植田良平』

『どうしたんです』

良平は、そばへ来て、捕まえるように、小次郎の手をにぎった。

『年暮から、ふっと、道場へお帰りがないので、若先生も、どうしたのかと口辭に申しました』

『ほかの日には帰らなくても、今日さえ、ここへ来れば、それでよいのだから』

『ま、とにかく、あちらまでお越しを』

と、良平や他の門下たちは、態よく彼を取りかこんで、自分たちの屯している原の中ほどへ、引込むように、伴れて行った。

大刀を背に負っている小次郎の派手な身仕度を、遠くから見つけると、見物の眼はすぐ、

『武蔵、武蔵』

『武蔵が来た』

と、ささやき合った。

『ホ、あれか』

『あれだ——宮本武蔵は』

『ふうむ……たいそう伊達者だ、だが、弱くはなさそうだ』
取り残された顔つきの城太郎は、辺りの大人たちが真顔になつてそれを受けとっているのだ、

『ちがうよ、ちがうよ、武蔵様はあんな人だもんか、あんな歌舞伎の若衆みたいになかつていてるもんか』

むきになつてその誤謬を正していた。

彼の訂正の届かない所にいる見物たちも、やがて、様子を見ていると、どうもそれらしくないことに気づいて、

『はてな?』

と、首をかしげはじめた。

原の真ん中へ出て行つた小次郎は、そこに立つと、吉岡門下の四十名ばかりの者を、例の高慢な態度で見くだして、なにか演舌しているらしいのである。

『……………』

植田良平以下、御池十郎左衛門だの太田黒兵助だの、南保余一兵衛、小橋藏人などよぶ十剣の人たちは、その演舌が氣にくわない顔つきで、むっと黙りこくつたまま小次郎のよくうごく唇元を怖い眼をして見つめているのであった。

五

そこで、佐々木小次郎が、一同へ向つて、演舌していることには、

『まだここへ、武蔵も清十郎も来ないというのは、吉岡家の天佑ですぞ。諸氏はよろしく、手わけをして、清十郎どのがここへ来ぬうち、はやく途中から道場へ連れてお帰りなされ』

それだけでも、吉岡方の人たちを激昂させるに十分であるのに、その上にまた、

『わしのこの言葉は、清十郎どのへ対して、無二の助太刀でござりますぞ。この言葉以上の助太刀がどこにあらう。わしは、吉岡家にとつて、天来の予言者だ。はつきりと、予言しておく。——やれば、清十郎どのの、気の毒だがきつと敗れる。武蔵という者のために、きつと生命をとられる』

かりそめにも吉岡門の人間として、これが、いい顔をして聞いているはずはない。植田良平の如きは、土氣いろになつて、小次郎をねめつけていた。

十剣の中の御池十郎左衛門は、我慢がなくなつたのであらう、小次郎がまだなにかいおうとする胸元へ、ぐつと自分の胸を寄せて行つて、

『なにをいうのか、貴様は』

右手の脇を、顔と顔のあいだへあげたのは、いうまでもなく、居合の身がまえで、手練の一颯を見せようかという意思の表示である。

ニコと、小次郎は笑顔をこしらえてそれを眺めた。ずんと上脊丈があるので、笑鬚までが高慢に人を見下げて見えるのだつた。

『お氣にさわつたか』

『あたりまえだ』

『それは失礼』

軽くかわして——

『では、助太刀はしないことにしよう。氣ままになされというほかはない』

『た、たれが、汝ごときに、助太刀を頼もうや』

『そうでもありますまい。毛馬堤からわしを四条の道場へ迎えてゆき、あんなに、わしの機嫌をとったではないか。其許たちも、清十郎どのも』

『それは、ただ客として、礼を与えたまでのこと。……思いつたやつだ』

『ハハハハ、よそう、ここでもまた、其許たちと、試合の飛び火をこしらえても始まるまい。だが、わしの予言をもつて見くらべて、涙で悔いの種になすまいぞ。——わしが眼をもつて見くらべたところでは、清十郎殿には九分九厘まで勝目が無い。この正月の一日の朝、五条大橋の欄に武蔵という男を見かけ、その途端にこれはいけないと思ったのだ。……あの橋のたもとへ貴公たちの手で掲げた試合の高札が吉岡家の衰亡を自分で書いてある忌中札のようにわしには見えたのだ。……だが、人間の衰弱は、その人間にはわからないのが世の常かもしれん』

『だ、だまれッ、貴様は、きょうの試合に対して、吉岡家へ、ケチをつけに来たのだな』

『人の好意すら、素直に受け取れなくなるということが、抑々、衰運の人間のもつ根性だ。なんとも思うがよい。明日とはいわない。もうやがて一刻の後には、その眼がいやでも醒めずにいい』

『いったな！』

陰悪きわまる声が、唾とともに、小次郎へ浴びせかけられた。怒りきった四十名からの人数が、一歩ずつうごいても、その殺気は、真黒に野原を掩うほどなものがある。

だが、小次郎は心得たものなのである。逸はやく飛びのい

て、売る喧嘩なら買ってもよいという血気が隠されなかった。せつかく、彼が自分で説いていた好意というものは、これでは怪しみたくなるようなものである。わるく解釈すれば、ここに集まった群衆心理を利用して、武蔵と清十郎との試合の人氣を、自分が攫ってしまうつもりでやっている仕事ではないかと取られても仕方がないほどにまで、小次郎の眼は、途端に、好戰的であつた。

六

群衆が遠くからその様子をながめて、どよめき出したところであつた。

その人混みを突きぬいて、一匹の小猿が、原へ向つて、まるで鞠でも転すように跳んで行つた。

小猿の前には、若い女が、これも又、転ばんばかりの迅きで、見得もなく、駆けて行くのが見える。

朱実であつた。

吉岡門下の人々と、小次郎とのあいだに、すんでのこと、血でも見るかと思われた陰悪な空氣は、その朱実が、ふいに後からさげんだ言葉で掻き消された。

『小次郎様、小次郎様ッ。……どこですか、武蔵様のいるところは。……武蔵様はいませんか』

『……あ？』

小次郎が振り向く。

吉岡方の、植田良平や、他の人々も、

『や、朱実じゃないか』

と、つぶやいて、一瞬ではあつたが、すべての者の眼と怪訝

りとが、彼女と小猿の姿にとらわれてしまった。

小次郎は叱るように、

『朱実、なんでお前はここへ来たのか。——来てはならんとい
つておいたはずだ』

『わたしの体です。来ては悪いのですか』

『いけないッ』
朱実の肩をかるく突いて、

『婦れ』
小次郎のいう言葉を、彼女は息を喘りながら烈しく顔を横に
振って拒んだ。

『いやです。——私は貴方のお世話にはなりましたが、貴方の
女ではないでしょう。……それを』

急に、朱実は、声をつまらせてしゃくり上げた。あわれっぱ
い嗚咽に、男たちの荒びていた感情が水をかけられたような気
がしたと思うと、その氣持を裏切って、朱実の次のことばは、
男性のどんな場合のものよりも強い血相をふくんでいた。

『それを、なんですか、あなたは私を数珠屋の二階に縛りつけ
たりなどしてッ。——わたしが、武蔵様のことを心配すると、
あなたは、わたしを憎いように苛めて来たではありませんか。

……その上……その上……きょうの試合には、きつと、武蔵は
討たれるだろう、わしも、吉岡清十郎には義理があるから、よ
しや清十郎が及ばなくても、助太刀して、武蔵を討ってしまわ
なければならぬ。……そういつて、ゆうべから泣き明していた
私を、数珠屋の二階に縛りつけて、あなたは今朝、出て行った
のではありませんか』

『……気が狂ったか、朱実、大勢の人中だぞ、青空の下だぞ、

なにをいうのか』

『いいます、気も狂いましょう、武蔵様は、わたしの心の中の
人です。……その人が、なぶり殺しになるかと思えば、凝とし
てはいられません。数珠屋の二階から、大きな声を出して、近
所の人に来てもらい、わたしの体の縛めを解いてもらって駆け
つけて来たのです。わたしは、武蔵様に会わなければならな
い。……武蔵様を出してください、武蔵様はどこにいますか』
『……』

小次郎は、舌うちをして、彼女の凄まじい饒舌の前に黙って
しまった。

逆上していることは確かだが、朱実の口走っていることに嘘
はないらしい。それが嘘でないとすると、小次郎という男は、
この女性に温かい世話をかけながら、半面にはまた、この女性
の心と体とを極端に虐待して楽しんでいるのではないかと疑わ
れる。

それを、人前で——しかもこうした場所——忌憚なく女の
口から暴かれたのでは、小次郎も、間の悪いことはもちろんだ
し、むかむかと腹も立って、女の顔をじっと睨めすえていた。

——すると。

いつも清十郎の供について歩く奉公人で、若党の民八という
男が、街道の並木からここへ鹿のように走って来て、手をあげ
ながら嗷鳴った。

『た、たいへんだッ、皆さん、来て、来てくださいッ。——若
先生が、武蔵のために、やられました。や、やられました』

民八の絶叫は、一同の顔から血の氣を奪ってしまった。足もとの大地がふいに陥没して行くような驚きを、

『な、なにっ?』

異口同音に口走って、

『若先生が——武蔵に?』

『ど、どこで』

『いつのまに』

『ほんと、民八』

上わづったことばが各々の口から不統一に吐き散らされた。

——しかし、ここへ立ち寄って身支度して行くといっていた清十郎が、ここへは姿を見せもせず、もう武蔵と勝敗を決してしまつたという民八の報らせは、なんだか、まだ真実のような気がしない。

奉公人の民八は、

『早く、早く』

と、呂律のまわらない声をつづけながら、そこで息もやすまずに、元来た道のほうへ向って、また、のめるように駆け戻って行く。

半信半疑であつたが、嘘や間違いとも思われないのである。

植田良平や御池十郎左衛門などの四十余名は、

『すわ……』

と、民八の後につづき、野火の焰を越えてゆく獣のような迅速さで、草埃りを揚げながら、街道の並木へ出た。

その丹波街道を北へ向って、五町ほど走ってゆくと、また、並木の右手に互って、淵としたまま、静かに、春先の陽に伏している広い枯野がある。

つぐみや鵬が、なんのこともないように啼いていたが、パツと空へ立った。——民八は、氣狂いのように草の中へ駆け込んだ。そして、なにかの古塚の跡らしく饅頭形に土の盛りだっている辺まで来ると、

『若先生っ、若先生っ』

もういちど、ありつたけな声をふり絞って、大地へしがみつのように膝を折った。

『……やつ?』

『お、お』

『若先生だ』

突き当つた事実のまえに、後から駆け来る足がみな釘付けになつた。見ると、藍花染の小袖に革のたすきをかけ、白い布で、額から後髪へ汗止をきりりと締めている侍が、草の中に顔を埋めて、俯つ伏しているのである。

『——若先生』

『清十郎様っ』

『しっかりして下さいっ』

『われわれです』

『門下達でござる』

抱き起された頭は首すじの骨がくだけているように、ぶらんと重く傾いでしまう。

白い汗止の鉢巻には、一滴の血もついていなかった。袂にも、袴にも——辺の草にも血らしいものはこぼれていない。けれど、眉も眼も苦しげに塞いだまま、清十郎の唇は野葡萄のような色をしていた。

『……息は、息は、あるのか』